根城小

主体的に学び合う子の育成

～各教科における対話的学びの実現を目指して～

（３年計画の２年次）

校長　中　村　雅　臣

１　研究主題について

昨年度、本校では、「主体的に学び合う子の育成」という研究主題のもと、児童の考えを深める対話的学びの在り方に焦点を当てて研究を進めた。全学級が研究主題に沿った授業を様々な教科で実践し、検証してきた。研究の成果として、次の点があげられる。

・考えたくなる課題設定場面では、前時の復習をしたり、考えやすいテーマから想像させたりして本時の課題と関連付けるなど、「課題をつかむ」「意欲を高める」「自分で、見通しをもたせる」ための手立てを工夫したことで、児童が意欲的に課題に取り組むことができた。

・伝え合う場面では、「ルール（進行、言葉）」「話し合わせ方」「発表のさせ方」のほか、コロナ禍における対話の充実を考え、「ハンドサイン・うなずき」「書いて伝える」「一人が発表し教師が全体につなげる伝え合う活動」などの手立てを工夫した。制限がある中での対話であったが、様々な対話を取り入れた実践を行うことで主体的に学び合う子の育成が図られた。

・全教員が様々な教科で校内研の視点に沿った授業を公開し、研究内容を意識して日々の授業実践に努めるようにした。参観する人数を限定して授業を公開したことや、定期的に授業実践報告会を行い、成果や課題を明らかにしたことは、教師間の学び合いや授業実践への意欲向上につながった。

また、昨年度のＣＲＴの結果（観点別得点率全国比）を見ると、ほとんどの学年において、４教科の全観点が全国平均を上回っていた。さらに、全ての教科において「思考力・判断力・表現力」に関する観点別の得点率が、合計得点率を上回っていた。上記の点から、日常の授業において、学習課題を理解させ、対話的学びの工夫をした授業を展開することで、児童の「思考・判断し、表現する力」を伸ばすことができたと思われる。

一方、課題として、次の点があげられる。

・コロナ禍にあった昨年度は、子ども同士が考えを伝え合う対話的な授業が思うように実践できなかったため、対話的な活動を取り入れて考えを深めたり、認め合ったりする授業の展開や仮説の検証について十分に研究されたとは言えない状況であった。すべての児童が主体的に学び合える授業の実現のために、対話的な学びや認め合う場づくりの研究と検証の手立てを工夫していくことが課題と考える。

そこで、今年度は、「児童が主体的に学び合うためには、どのような対話的な活動と認め合う場の工夫が必要か」を全教科での授業づくりの実践により研究していくことにした。課題設定や発問の工夫を引き続き行い、自分たちの考えを伝え合う交流活動を重点項目とする。さらに、まとめや振り返りを書いて表現する活動･認め合う場の設定も取り入れながら、より充実した対話的学びについて協議していく。そのような研究実践を積み重ねることで、主体的に学び合う子が育つと考える。

２　研究のねらい

児童が主体的に学び合うためには、対話的な学びの展開を工夫していくことが効果的であることを授業実践を通して明らかにする。（課題と向き合う、伝え合う、認める・認め合う）

３　研究仮説

対話的な学び（課題と向き合う、意思表示・伝え合う、認める・認め合う）の工夫をすることにより、児童が主体的に学び合うことができる。

４　研究内容

対話的な学びの工夫

ア　考えたくなる課題設定や意欲的に課題に向かうための手立ての工夫（課題と向き合う）

イ　目的を明確にした伝え合う場の効果的な設定（意思表示・伝え合う）

ウ　伝え合う活動やまとめにおいて、お互いを認め合う場づくりの工夫（認める・認め合う）

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	曜	授業研究	全体会等
４	１４	水	今年度の研究の方向性について	全体会（共通理解）
７	１４	水	授業実践報告①・授業に向けての指導案作成	全体会（授業研究）
９	８	水	校内授業研究（１年）	全体会（授業研究）
９	２９	水	校内授業研究（５年）	全体会（授業研究）
１０	２０	水	授業実践報告②・授業に向けての指導案作成	全体会（授業研究）
１１	１９	金	授業研究（指導課・センター訪問）（４年）	全体会（授業研究）
１２	８	水	授業実践報告③・授業に向けての指導案作成	全体会（授業研究）
１	１２	水	校内研修アンケートの結果と研究のまとめ	全体会（成果と課題）
１	２６	水	来年度の研究の方向性について	全体会（成果と課題）

＊授業研究学年以外の先生方は、校内研究の視点にそった公開授業を全員行う。

(2) 一般研修等

月	日	曜	一般研修	備考
５	２６	水	児童理解　配慮を要する児童	
６	２３	水	ＩＣＴ活用研修	
８	１９	木	アセス活用研修	外部講師
８	２５	水	県学習状況調査分析・考察	
２	１６	水	ＣＲＴ分析・考察	

６　研究の成果

(1)　課題設定場面では、既習事項を想起させて課題と関連付けたり、課題解決のためのイメージをもたせる資料提示を工夫したりする手立てを取り入れた。このことにより、児童の追究意欲が高められ、見通しをもって課題に取り組む姿が見られた。

(2)　伝え合う場面では、「身振り手振りを取り入れて表現させる」「分かりやすく書いて伝える」「教師が全体の合意形成をサポートする」などの手立てを工夫した。様々な対話を取り入れた実践を行うことで、友達と関わり合いながら学ぶよろこびを感じさせることができ、学びに向かう主体性が高められた。

(3)　認め合いの場面として、小グループでの伝え合いの後に相手の話した内容に対する励ましや評価をしたり、学習内容のまとめや感想のふりかえりの他に、「友達のいいところ」を視点として与え書く活動を取り入れたりした。これらの活動により、互いに認め合う姿が見られ、子ども同士のよりよい人間関係作りにつながる授業を進めることができた。

７　研究の課題

(1)　課題提示の工夫により、児童は意欲的に課題に取り組もうとするが、自力解決では活動や思考が進まないという場面も見られた。課題を自分のものとしてとらえさせ、より具体的な見通しをもたせるなどの教師側の働きかけを工夫していく必要がある。

(2)　伝え合う場面では、話合いの目的が曖昧になってしまった実践も見られた。自己の考えを広げ深めるための対話的な学びの実現のために、伝え合う活動の目的を明確にし、児童にも目的意識をもたせた授業展開を考えていく必要がある。

(3)　認め合う場面では、友達の頑張りを認めるだけでなく、交流した内容のよさや共感できたことにも着目させることが次の学びへの意欲につながると考える。認める内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような認め合いの場を設定して、学び合いのよさを実感させていきたい。

（記入者　相馬　昌文）